國學院大學学術情報リポジトリ

ムトスとムズ：現実・非現実の観点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三宅, 清, Miyake, Kiyoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000642

ムトスとムズ
—現実・非現実の観点から—

三宅　清

1　はじめに

ムズはムトスの変化形であることは、その過程には古来諸説ある[1]ものの、大方支持されていると思う。そこでムトスとムズに関する先行研究を簡単に纏めてみると、夙に吉田金彦（1961）の今昔物語集を主な資料として、和漢混淆等の文脈と用法からのアプローチがみられる。吉田金彦（1962b）もその延長線上に位置づけられる。それに対し、中古の和文を対象として意味、用法から、アプローチを試みたのが、関　一雄（1990）（1991）、片仮名文を対象として、意味、用法からアプローチを試みたのが、田中雅和（1995）である。また、ムトスを、「む」が文末となる、「む」文末文を受ける「とす」、すなわち「＜・・・む＞とす」と人称、主に意志の用法の関わりを論じた中村幸弘（2018）（2019）や、中古中世のムトスとムズを現代語の「ようとする」と関連させて意味、用法を述べた鈴木薫（2020）もある。鎌倉喧子（1993）は、ムズのズをゾの転とする独自の立場に立って論を展開している。

本稿では、それらの先行研究から知見を得ながら、改めてムトスとムズの意味の違いを考察する。

ムトス、ムズは、いずれもムを含んでいる。ムの主な意味については、推量、意志がある。人称から区別する論も多いが、推量か意志か迷う例があるのも事実である。本稿の趣旨は、推量か意志かを考察するのではない。推量も意志も、非現実の世界に即して描かれる概念である。つまり、動詞にムが接続したとして、推量にしろ、意志にしろ、発話、思考の時点には、その動詞が表す動作は実現していない。その場合、表されるのは非現実の世界である。例えば、『日本国語大辞典』（第二版・小学館）に挙げられている例では、

（推量）これや我が求むる山ならむと思ひて（竹取物語）

「山なのだろうか」と思っている時点で、この山が自分が求めている山か否かは明確ではない、非現実の事態である。

（意志）都出でて君に会はむと来しものを来しかひもなく別れぬるかな（土佐日記）
この歌を詠んでいる時点では、「君に会ふ」という事態は、実現していない、非現実の事態である。推量、意志が非現実の世界を表すのは現代語でも同様である。井島正博（2010）では、上代・中古語の推量の助動詞は二種類に分けられ、

> 現実世界の事態を推量する「現実推量」と、現実世界とは切り離された仮想世界で何らかの事態を思い描く「非現実推量」とである。

と指摘している。高山善行（2002）でも、

> 伝統的な「推量の助動詞」という枠組みには、＜現実性＞―＜非現実性＞の対立が組み込まれていない。この対立を組み込んだ形で再構築されるべきである。

との記述がある。

そこで本稿では、ムトスとムズについて、主に現実、非現実という概念と関わらせて論を進めていく(2)。そのような立場からのムトス、ムズの研究は、管見に拠ればみられない。

資料は、中古の資料で、ムトス、ムズが比較的多くみられる今昔物語集を使用する。今昔のムトスについては、田中雅和（1995）で、その読みからムトスとムト為は異なる語との指摘があるが、本稿ではテキストとした『新編日本古典文学全集』１～４巻（小学館）の表記、読み（馬淵和夫　国東文麿　稲垣泰一校注）に従う。今昔にはムトスが429例、ムズが138例みられる。用例後の（　）内は巻数・頁数・行数を示す。

２　仮定と確定

仮定条件の帰結句に、ムがかなりみられることは、例えば高山善行（1993）に指摘がある。そこで、ムトスとムズで、仮定条件と、その帰結句がどのような様相を呈しているかをみてみる。併せて、確定条件についても調査した。

ムトス

○仮定

１亦或ル上達部ノ宣ハク、「彼レ道心深キ者ニテ、心ニ任セテ翔ハヾ、見苦キ事ヤ有ラムト為ラム」ト。（１巻265・６）

２若其ノ前ニ独リ出デバ、亦迷ヒナムトス」ト云テ、米少分ヲ預ケ置テ出ヌ。（１巻334・４）

３今日ヨリ後、案内モ知ヌ人ノ為ニ悪キ事ヲ至サバ、其時ニ必ズ射殺シテントスルゾ」ト云テ、（３巻512・14）

○確定

４「何ニシテカ此霊ノ難ヲバ可遁カラム。我ヲ怨テ思ヒ死ニ死タル者ナレバ、我ハ彼レニ被取ナムトス」ト恐ヂ怖テ、（３巻294・６）

5彼ハ上ニ登テ力ヲ得ベケレバ、喜テ登ラント為ルヲ、暫ハ我ニ任セテ見ムニ、（3巻517・1）

6「此レ食」ト飯ヲ分テ取セタレバ、法師吉ク食ツ。既ニ食畢ツレバ、男本荷タル者ヲ取テ荷ハムト為ル程ニ、法師ノ思ハク、（4巻318・9）

ムズ

○仮定

7此ヨリ北ニ峰ヲ超テ行カムニ、中ニ高キ峰有リ。其ノ峰ノ上ニ登テ、『修陀々々』ト呼バヾ、答テ出来ル者有ラムズラム。其レニ値テ可請シ」ト。（2巻415・6）

8若シ聞ナバ、中々ニ我道モ絶、此ガ為ト思フ女子ノ為ニモ何ガ有ラムズラム。此男ハ極テ心幼気ニ見ユル君ヲ。少シモ事モ違ハヾ、云ヤ出サンズラン」ト。（3巻480・12）

9此浪ノ来ナバ、此郷ニハ高塩上テ無成ナンズルハ。可遁」ト、騒ギ周章テ云ヘバ（3巻529・1）

○確定

10「来タラント為ル敵モ人ノ体ニハ非ズ、儲ケムズル我身モ亦人ノ体ニハ非ズ。今明日見テン。先彼来テ島ニ懸ラン程ニ我ハ此上ヨリ下来ランズルヲ、前々ハ敵ヲ此滝ノ前ニ不令上シテ此海際ニシテ戦ヒ返スヲ、明日ハ其達ヲ強ク憑マンズレバ、彼レヲ上ニ登センズル也。（3巻516・16）

11風ゾ強ク吹テ、屋ノ上ノ板ニ吹付ニケレバ、水ニナガレテヤ死ナムズラムト思フ程ニ、（3巻465・6）

ムトスは、仮定が22例、確定が12例みられる。それに対し、ムズは、仮定が8例、確定が13例である。ムズの仮定の例には、7、8のようなラムと共起する例も少なからずある。その場合、7は「呼バヾ～（有ラムズ）ラム」8は「違ハヾ～（云ヤ出サンズ）ラム」と、仮定句を受ける帰結表現は、ラムと考えるのが自然である。その点を考慮すると、ムズの仮定の例はより少なくなる。ムトスは、仮定が多く、ムが非現実の事態を表しているといえる。一方ムズは、ムがムトスの場合のようには非現実の事態を表していないのではないか。

また、いわゆる確述用法も、ムトスとムズで異なる様相を呈する。

ムトス

12亦、本国ノ王珠ヲ失タル咎ヲ以テ、我等ガ頸ヲ被切ナムトス。然レバ、其珠ヲ返シ給テ此ノ苦ヲ免シ給ヘ」ト。（1巻96・10）

13其ノ時ニ、此ノ人童子ニ告テ云ク、「我ヲ殺セリシ我ガ兄、此ニ来ニタリ。我レ速ニ去ナムトス」ト云フヲ、（2巻558・14）

14今五日有テ六日ト申サム巳ノ時許ニ返シ申シテムトス。（4巻89・10）

ムズ

15此ノ人、『具シテ行カム』ト云ヘバ、明日ハ不知ズ、随テ行キナムズレバ、

形見ニモ為ヨ」トテ泣々ク取ラスレバ（２巻179・３）

16其ヲ呼ビ聞ヘツル事ハ、夜前笛ヲ吹テ過ギ給ヒシニ、命今明ニ終ナムズル相、其笛ノ音ニ聞ヘシカバ（３巻298・15）

17彼ノ大刀ハ実ニ吉キ大刀ニテ有ケレバ、大刀ノ欲カリケルニ合セテ、「極タル所得シテムズ」ト思テ（４巻357・６）

確述用法[3]は、ム、ベシなどに特徴的な用法であるが、ムトスは429例中75例（17.5％）ムズは138例中16例（11.6％）みられる。ムトスの方がムに近いといえるのではないか。

３　ムトスについて

ムトスのスは、いうまでもなくいわゆるサ変動詞のスである。基本的な動作で、ムトスの場合、現実世界に即した事態を表す。ムは前述のように、非現実世界に即した事態を表す。つまり、非現実世界と現実世界の事態とをトで繋いでいる表現がムトスである。そのことは、次のような例からもいえる。

18我レ、今夜、世ヲ去ナムトス」ト宣テ、（１巻35・11）

19最後ノ時ニ臨デ、里ニ出テ、相知レル僧俗ノ許ニ行テ、別レヲ惜ムデ云ク、「今生ノ対面只今日許ニ有リ。明後日ヲ以テ我浄土ノ辺ニ参ラムトス。後々ノ対面ハ真如ノ界ヲ期ス」ト云テ（１巻353・12）

20其ノ所ニ留テ、彼等ガ為ニ一日ノ内ニ法花経一部ヲ書写供養ジ奉ラムトス。（１巻405・11）

21「妬哉。我レ今三年徴ラムトシツル者ヲ」ト。（２巻388・１）

22精進既ニ明日七日ニ満ナント為ルタニ、法師来テ云ク（３巻54・６）

23而ルニ、明後日ノ未時ニ、大風吹テ此ノ寺倒レナムトス。（３巻120・８）

24努々愚ニ不可為、明日ノ巳時許ヨリ儀立テ、午時許ニゾ戦ハントスル。（３巻517・４）

25今五日有テ六日ト申サム巳ノ時許ニ返シ申シテムトス。（４巻89・10）

26山城伊賀ノ事ヲ沙汰仕リ候フ間ニ、何方モ沙汰仕リ不遣ズシテ、異多ク罷成ニタレバ、否仕リ不遣ヌヲ、今年ノ秋、皆成シ畢候ヒナムトス。（４巻238・７）

27母ハ死テ後ハ臥シテ不離ザリケレバ、既ニ暁ニ多武ノ峰ニ行ムト為ルニ（２巻490・９）

波線部で示したように、ムトスは、時を表す語句と共起する例が、ムズより多い。ムトスは93例、ムズは18例みられる。時を表す語句と共起する場合、時を表す語が無い場合より、その事態はより具体的で、現実に近い。例えば19では、「明後日」が無いと、いつ「浄土ノ辺ニ参ル」という事態が起こるか不明だが、「明後日」という語があることにより、「浄土ノ辺ニ参ル」という事態がより現実味を帯びる。もちろん、あくまで＜現実に近い＞＜現実味を帯びる＞であって、現

実ではない。19で言えば、実際には「明後日」「浄土の辺ニ参ル」ことはないかもしれない。18は単に「世ヲ去ル」のではなく、その事態が「今夜」現実化するかもしれない。20は、「法花経一部ヲ書写供養ジ奉ル」という事態が「一日ノ内ニ」行われようとしている。現実には、その事態が行われるかどうかは不明だが、発話、思考の時点では、現実化させようとしている。時を表す語句が無い場合がその事態の現実化が漠然としているのに対し、時を表す語句で限定されている方が、より現実味を帯びる。他の用例にも同じことがいえる。それは現代語でも同様である(4)が、そのようなケースがムトスに多いのである。もちろん、上述のように、ムズに時を表す語句と共起する例が無い訳ではない。

28此ノ来レル女ハ、暁ニ立ムズル儲ナムド営ムデ有ルニ、家主ノ女ノ思ハク（2巻178・7）

29只今マデハ求得タル方侍ネバ、明年ノ近来、何ナル心センズラン（3巻504・5）

30父法師、「現ニ云フ事理ナレドモ、明日死ナムズト云トモ、何デカ母ヲバ子ニハ替ヘム。命有ラバ子ハ亦モ儲テム。汝ヂ歎キ悲ム事無カレ」ト誘フト云ヘドモ（2巻546・13）

付言すれば、時を表す語は、ムトスの被連体修飾語にも多い（(　) 内の数字は用例数、数字が無い語は各1例)。ムトスと時を表す語句との親和性を示している。

○ムトス

程（18）時（12）間（9）所、日

31然テ其後ニ各楯ヲ寄セテ、今ハ射組ナムト為ル程ニ、良文ガ方ヨリ充ガ方ニ云ハスル様、（3巻396・14）

32千観此レヲ聞テ後、年月ヲ経テ、遂ニ命終ラムト為ル時ニ臨テ、手ニ造ル所ノ願文ヲ捲澆リ、口ニ弥陀ノ念仏ヲ唱ヘテ、失ニケリ。（2巻62・1）

33而ル間、夜半許ニ其ノ家ニ火出来ヌ。人皆澆テ、先ヅ他ノ財ヲ取出サムト為ル間ダニ、此ノ経ヲ忘レ奉リニケリ。（1巻235・8）

○ムズ

事（2）人（2）様、我身、者、気色、盗人、夜、時、儲、程、相

34祖ノ云ク、「只一人ノ侍ル娘ヲ、然々ノ事ニ被差テ、歎キ暮シ、思ヒ明シテ、月日ノ過ニ随テ、別レ畢ナムズル事ノ近キ侍ヲ、悲ビ侍ル也。（3巻493・12）

35彼ノ右大将ハ身ノ才モ賢ク座ス。年モ若シ。永ク公ニ仕ラムズル人也。（3巻145・1）

ムトスが現実に即した概念をも表すことは、やはりムトスに特徴的な副詞からもいえる。その一つとして「既ニ」を取り上げる(5)。「既ニ」は、例えば『日本国語大辞典』では、

（多く下に推量の語を伴って）事が近づいた状態を表わす。もう少しで。すんでの事に。もはや。まもなく。

とある。換言すれば、ある事態の現実化が迫っているということである。

36其後、一言主ノ神、宮城人ニ付テ云ク、「役ノ優婆塞ハ、既ニ謀ヲ成シテ国ヲ傾ケムト為ル也」ト。（1巻44・13）

＜謀略をもって国を滅ぼそうとしている＞

37然レドモ、忽ニ行ク事モ無クテ、乍思ラ過ル間尚吉々ク思ヒ定メテケレバ、既ニ出テハ去ナムト為ルニ、其ノ夜ノ夢ニ、貴キ老僧来テ宣ハク（1巻465・12）

＜出て行こうとした、その夜の夢に＞

38如此ク勤メ行ヒテ、年来ヲ経ルニ、真頼老ニ臨テ身ニ病有テ、既ニ命終ラムト為ル日、弟子長教ト云フ僧ヲ呼ビ寄セテ、告テ云ク（2巻52・7）

＜年を取り病を得、もう命が終ろうとする日＞

39病弥ヨ増リ、形チ漸ク衰テ既ニ死ナムトス。（3巻75・8）

＜病状はいっそう募り、だんだんと衰弱して、死にそうである＞

40侍、「糸喜キ事ニ候フ也」ト云テ、既ニ下ラムト為ル程ニ、侍年来棲ケル妻ノ有ケルガ、不合ハ難堪カリケレモ（4巻82・3）

＜（京から、守の任国に）下ることになったが＞

各々、「謀ヲ成シテ国ヲ傾ケル」「出テハ去ル」「命終ル」「死ヌ」「下ル」という事態が現実化しようとする状況にある。「既ニ」はムトスに22例みられる。それに対し、ムズには次の2例がみられるのみである。

41「既ニ我ガ家ニ入ラムズル盗人ニテ有リ。其レニ我ガ許ニ心安ク思テ仕フ侍ノ仲スル事ゾ」ト吉ク聞ツ。（4巻328・5）

42而ル間、経方京ニ可上キ要事有テ日来出立ケルニ、既ニ日上ラムズル夜、「彼ノ女ノ許ニ構テ行バヤ」ト切ニ思ケルヲ（4巻508・9）

その他に、「既ニ」と同様に、事態の現実化が迫っていることを表す副詞として、「忽ニ」（10例）「遂ニ」（5例）「必ズ」（20例）「定メテ」（3例）などが挙げられる。

43天智天皇建給テ後四百余歳ニ成テ、未ダ如此ノ火事無カリツルニ、忽ニ焼失ナムトス。（1巻200・10）

＜タチマチニ焼ケ失セル＞

44而ル間、年月積テ、遂ニ入道命終ラムト為ル時ニ臨デ、身ニ聊ノ病有ト云ヘドモ、苦シブ所少シ。（2巻97・12）

＜ツイニ命ガ終ワロウトスル時が近ヅキ＞

45妻、「由無キ事ヲ云テ、我レ必ズ被殺ナムトス」ト歎ケルニ（2巻234・6）

＜私ハキット殺サレル＞

46心ノ内ニ思フ様、「明日定メテ布施ヲ令得メムトス。其レヲ不得ズシテ、只

此ノ衾ヲ盗テ、今夜ヒ逃ナム」ト思テ（１巻494・10）
＜明日ハキットオ布施ヲクレル＞

「忽ニ」「遂ニ」は事態の実現が切迫していることを表し、「必ズ」「定メテ」は事態の実現を確信していることを表す。ムズは、「定メテ」（４例）「忽ニ」（２例）「必ズ」（０例）「遂ニ」（０例）である。

以上のように、時を表す語句との共起、ある事態の現実化が迫っていることを表す副詞との共起からみて、ムトスは基本的に非現実でも、ムズに比べて現実に近い概念をも表す。

４　下接形式

次にムトスとムズの下接形式を挙げる。

47敵ノ軍ハ身ヲ棄テ、剱ヲ振テ、囲ヲ破テ出ムトス。（３巻451・９）

47のような終止用法が176例と最も多く、助詞ニに接続する例が52例、名詞41例と、それだけで過半数を占める。

48馬ヲモ引入テ夕立ヲ過サントスルニ、家ノ内ニ平ナル石ノ、碁枰ノ様ナル有。（３巻533・７）

49我レ此ノ所ニ有テ、此ノ鬼ノ為ニ被噉ムト為ル人ヲ九百九十九ヲ人助ケタリ。（１巻23０・16）

それに対し、ムズは、ラム41例、終止用法18例、名詞14例、連体ナリ８例、ゾ７例、ナメリ４例などと、ムトスと異なる様相を呈する。

50「今ハ死ナムズラム」ト思テ、観音ヲ念ジ奉テ、何コトモ無ク這ヘバ（２巻236・３）

51然レバ、若僧寄来テ、男ノ懐ヲ捜ムト為ルニ、男ノ思ハク、「我ガ懐ニ刀有。定テ捜出ナムトス。其後ハ我レ吉キ事不有ジ。然レバ、我ガ身忽ニ徒ニ成ナムズ。同死ニヲ、此老僧ニ取付テ死ナム」ト思テ（３巻55・13）

52彼ノ右大将ハ身ノ才モ賢ク座ス。年モ若シ。永ク公ニ仕ラムズル人也。（３巻145・１）

53思ヒモ不懸ズ、山ニ遊ビニ行キタリケル道ヲ踏違テ、此ニ来レル也」ト云ハムズル也。（４巻531・３）

54不然ザラム限ハ、影ノ如ク副ヒ奉テ候ハムズルゾ」ト云テ、立チ去ヌ。（４巻300・14）

ここで注目したいのは、ラムの多さである。ムとラムは同じム系の助動詞であり、それがいわば重なって用いられているのは、不可解である。ムズラムの場合、ムズで括られる事態は、ラムの対象と考えられる。ムズがムに比べ、例えば『日本国語大辞典』に強調の意味があるという記述がみられるが、強調の意味はラムという推量の対象とはなり得ないのではないか。井島正博（2016）でも、ラムは

「現実世界に関わる助動詞」に分類されている[6]。

同じことは、ムズに比較的多くみられる、いわゆる断定の連体ナリ、ゾにもいえる。それらは現実の事態をその対象とする。前述の仮定、確定でも述べたように、ムズのムがあまり機能していないのではないか。ムズ一語で、ム単独では表されなかった独自の意味を有していると思われる。そして、それは、前述のラム、連体ナリ、ゾなどの下接から考えると、ムトスと同様、基本は非現実ながらも、現実の事態をも対象とする意味である。ムトスはムズに比べて、第３節の結論「ムトスは非現実でも、ムズに比べて、現実に近い概念をも表す」と矛盾するようであるが、その混沌とした状況が、時代的にも、今昔でのムトスとムズの有り様をそのまま表しているといえる。

また、今昔では、前述の下接形式のように、ムズに様々な形式がみられるのに対し、ムトスは終止用法、助詞ニを下接している形式に偏っている。少なくとも形態的にはムトスは固定化（形骸化）しつつある。このような今昔にみられる様相は、やがてムトスが衰退し、ムズが優勢になる前兆ともいえる。今昔にみられるムトスとムズの状況は、ムトス→ムズの過渡期の端緒を表しているのではないか。

５　おわりに

以上述べてきたように、ムトスとムズは、その源を同じくしながら、異なる様相を呈する。ムズは、中世になると、ウズと形を変えて用いられる。ウズについては、先行研究もムトス、ムズよりも豊富であり、活用形の問題と関わらせて用法について述べられている論も多くみられる[7]。ウズの用法については、山田潔（2001）に詳しく、本稿第３節で触れた副詞との関わりも述べられている。

さらに、中世のムズ、ウズとベシの近似性に触れた論もある[8]。ベシの研究は膨大な蓄積があるが、例えば『日本国語大辞典』では

②確信をもってある事態の存在または実現を推量し、または予定する。

㋑近い将来、ある事柄がほぼ確実に起こることを予想する。

という記述がある。ムズの前身であるムトスは第３節で触れたように、時を表す語句、ある事態の現実化が迫っていることを表す副詞との共起からは、ムトスは非現実でも、ムズに比べて現実に近い概念をも表す。しかしながら、第４節で述べたように、下接形式からみると、ムズの方が現実に即した概念をも表すようになる兆しがみられる。ムトス→ムズの移行を考えると、ムズの変化形のウズがベシと近似性を有したとしても不思議ではない。

本稿で得られた結果をまとめると次のようになる。

１仮定条件の帰結句、確述用法においては、ムトスの方がムズよりムの意味が機能している。

２時を表す語句、ある事態の現実化が迫っていることを表す副詞との共起からは、ムトスはムズに比べて現実に即した概念をも表す。
３下接形式からは、ムズに比べムトスは固定化しており、ムズの方が、ムトスに比べて現実に即した概念をも表す。
４結論２、３は矛盾しているようだが、その混沌とした状況がムトス→ムズの過渡期の端緒の現れと捉えられる。

今後の課題としては、本稿で得られた結果を基にした、中古の他作品や、中世のムズ、ウズの調査が残されている。

注

（１）例えば吉田金彦（1962a）に詳しい。
（２）夙に、山田孝雄（1908）で、「推量をあらはす複語尾」「非現実の思想をあらはす複語尾」に区別されている。
（３）確述用法は、アスペクトが現実に即した概念か、非現実に即した概念かという問題が残る。井島正博（2009）では、「非現実世界であっても、時間的展開を考えることに支障はない」とある。
中西宇一（1957）でも、「なむ」「てむ」を例に挙げ、
「未来においてそのような状態が発生する」または「未来においてそのような動作が完了する」という、未来における発生ないし完了を意味するものと考えられ、したがってこれは「ぬ」「つ」の構造をそのまま未来に移動させたものであるとみることができる。
という記述がある。
（４）現代語で、例えば「だろう」が使用されている文
ａ晴れるだろう。
ｂ明日は晴れるだろう。
を比べると、「明日は」で限定されているbの方が未実現（非現実）ながらも、現実味を帯びている。
（５）山田　潔（1972）では、室町末期のウズについて、「既ニ」との呼応を取り上げている。
（６）三宅　清（2020）では、ラムには現実を表す事態に接続する場合もみられるという報告を行った。具体例を挙げる。
＊かく数ならぬ身を見も放たで、などかくしも思ふらむと（源氏物語・帚木）＜話し手の佐馬頭が、私のような人数にも入らぬ男をどうして女がこんなにも思ってくれるのだろう＞
ラムに上接する「かくしも思ふ」の「思ふ」は、佐馬頭にとって他者の心中だが、「かく」という指示詞によって、「思ふ」が話し手の立場から現実として捉えらているのが明確である。このような指示詞については、岡崎友子（2010）の直示用法「今、現場で目に見える、直接知覚・感覚できる対象があるもの」の規定が示唆的である。
（７）例えば、山内洋一郎（1997）など。
（８）菅原範夫（1991）は、延慶本平家物語において、ムズとベシの意味、用法の近似性について指摘している。山田　潔（1998）では、「室町期のウズは、ほぼベシの意味領域を網羅する」との指摘がある。

参考文献

井島正博（2009）「中古語完了助動詞のいわゆる確述用法」『むらさき』46号
井島正博（2010）「上代・中古語推量助動詞の疑問用法」『東京女子大学日本文学』第106号
井島正博（2016）「上代・中古語推量助動詞の連体・準体用法」『国語と国文学』第93巻第５号
岡崎友子（2010）『日本語指示詞の歴史的研究』ひつじ書房
鎌倉暄子（1993）「いわゆる推量の助動詞ムズ・ムズルとムトス―その本質と成立に関連して―」『鶴久教授退官記念国語学論集』（桜楓社）
菅原範夫（1991）「延慶本平家物語の「ムズ」小考」『鎌倉時代語研究』第14輯（武蔵野書院）
鈴木　薫（2020）「中古中世における「むとす」と「むず」」『国語研究』（國學院大學）第83号
関　一雄（1990）「平安和文における推量辞「むず」と物語用語「むとす」（一）」『山口大学文学会誌』第41巻
関　一雄（1991）「平安和文における推量辞「むず」と物語用語「むとす」（二）」『山口国文』14号
高山善行（1993）「モダリティとモード―古代語における仮定条件文の帰結表現をめぐって―」『日本語学』第12巻第13号
高山善行（2002）『日本語モダリティの史的研究』（ひつじ書房）
田中雅和（1995）「ムトスとムズの表現性―院政・鎌倉の片仮名文資料を中心にー」『国文学攻』148号
中西宇一（1957）「発生と完了―「ぬ」と「つ」―」『国語国文』第26巻第８号
中村幸弘（2018）「「＜・・・む＞とす」表現の読解と問題点―主体の人称と意志の有無とに注目してー」『国学院雑誌』第119巻第６号
中村幸弘（2019）「第三人称人物主体「＜・・・む＞とす」表現の読解―その「む」の多くを意志と認識するのは共同幻想かー」『國學院雑誌』第120巻第３号
三宅　清（2020）「中古推量系助動詞の諸相―未定・既定の観点から―」『國學院雑誌』第121巻第２号
山内洋一郎（1997）「助動詞「うず」の終止・連体形について―中世における終止形の残存」『文教国文学』37号
山田　潔（1972）「推量の助動詞「「う」「うず」「うずる」の一考察―キリシタン資料における実態―」『学芸　国語国文学』第７号
山田　潔（1998）「玉塵抄の助動詞「ウズ」」『学苑（昭和女子大学）』694号
山田　潔（2001）『玉塵抄の語法』（清文堂）
山田孝雄（1908）『日本文法論』（宝文館）
吉田金彦（1961）「今昔物語集における推量語「むず」「むとす」の用法」『訓点語と訓点資料』第19輯
吉田金彦（1962a）「「むず」（んず）の成立」『国語国文』第31巻第８号
吉田金彦（1962b）「中古・近古における推量語「むず」・「むとす」の用法」『国語と国文学』第39巻第３号